



第125号

親 諭

仏教すなわち仏の教えは、私たちが幸せてあるために必要不可欠のもので、これを譬えて言えば如意宝珠の宝のようなものです。

ところが、私たちはこの宝のある山に入っているにもかかわらず、その如意宝珠を取る事ができません。なぜなら、私たちはその宝を取ることで「信」という「手」を持たないからです。だから、私たちが仏の教えである宝を取るためにはそれを信ずるという「信心の手」をまず持つことが肝要です。

さらに、私たちの宗ではこの仏の教えである宝とは宗祖のご遺教であり、それは「相構えて、無欲清浄にしてよくよく念佛すべし」というお言葉です。

ここで「無欲」というのは、全く欲を無くすというのではなく、少欲知足のことであり、「正であり、喜である」ということです。したがって、真盛上人は、少欲知足の心で正しいこと、善いことを行うようにと説かれ、それはとりもなおさず慈悲喜捨の四無量心を持って布施行を行うようにということなのです。

また、「清浄」とは清浄心を持つことですが、このことはむさばり、怒り、誤った見方などを起こさないようにとの論であり、持戒、忍辱の行いをするということなのです。

次に「よくよく念佛すべし」とは、阿弥陀仏をいつも心にどめ置き、無欲清浄心を持って称名念佛するという精進と禪定の行いなのです。

要するに真盛上人のご遺教は、私たちに菩提心を持って菩薩の波羅蜜行を行い、阿弥陀仏を信じるようにと説かれたのです。

私たちはこのことをいつも心に掛けて日々信心の手を確たるものにし、地藏菩薩として菩薩行を実践していきましよう。

そしてそのことが、私たちが慈しみ、やさしさ、感謝の念を持つことができる人間へと転換させ、私たちに心の平穏という幸せを与えてくれるのです。

今年十一月二日から行われる不断念佛相続十九万回大法会の旨趣も正しくここにあります。私たちは皆道心者となってこの法会に値遇したいものです。

総本山西教寺第四十四世

大僧正 真應

四無量心



天台真盛宗管長 武田 圓寵

新年あけましておめでとうございませう。今年も皆様にとって良いお年でありますよう祈念申し上げます。

さて、慈悲喜捨の四無量心とは、「能く一切諸善の根本為り」と言われるように、私たちが正しい善なることを行う場合の根本の心です。「無欲清浄」と諭された真盛上人の心もここに根差しています。

まず、「慈」とは、慈しみの心です。お腹をすかしたわが子を見て、乳を与える母親の心です。「悲」とは、寄り添う心です。わが子が熱を出して苦しんでいるときに、それに寄り添い、早く治ってほしいと願う親の心です。「喜」とはともに喜ぶ心です。なにか幸せなことがあつて他人が喜んでいるときに、それを我が事のように共に喜ぶ心です。そして「捨」とは、すべての事柄を平等に見る心です。

私たちは、この四無量心を自分の身近なところからすべての命に広げていくことが大事です。親がわが子を思う慈悲喜捨の心を他人の子供にまで広げ、さらにそれをすべての命にまで広げていくことです。無量心と言われるゆえんです。そして、このように四無量心を広げていけば、次のようなことに気づかせられるのです。

すなわち、「いかなる命も、自分の命と別のものではない」ということです。

すべての命は、仏の教えである因縁性と相依性に基づいて、他のすべての命とつながっているのです。

コロナ禍の今の世相であるからこそ、私たちはこのことに気づかせられる四つの無量心を育てていきましよう。



不断念仏の祈りと安心

津市乙部 西来寺山主 寺井 良宣

私たち天台真盛宗では、宗祖真盛上人による念仏教化よりその相続を日ごとに数え、間もなく不断念仏十九万日の記念を迎えようとしています。折しも、昨年来より新型コロナウイルスの大流行に遇い、世界中の人々が恐怖と不安にあることすでに一年以上に及んで、海外と国内万民の無事安穩を祈るとともに、私たち自身の生活に安全と安心を念ずる日々となっています。

医療の分野でワクチンや薬が懸命に開発されつつあるなか、終息を見ずにいまだ感染が危惧されるときには、三密（密接・密閉・密集）を避け、マスク等の対策に気を配りながらも、来る記念法要には思わぬ苦心と変更が余儀なくされる可能性もあります。そのようになかにも、ご開山から賜っている普遍的な身心の修め方（不断念仏）によつて困難に対処して内面に安穩な生活を求めるとともに、尊き御法を人々と次世代に伝えてゆきたいと考えます。わが宗では、天台伝統の大般若・護

摩・光明供などの法儀をもちますが、これらは一定の修行の上に営まれて、

大事を願う時には特に重んじられる修法です。ただ、日常の勤行では「朝法華夕念仏」の習いで、法華経を読み念仏を称える形態をもちます。法華経に代えて菩薩戒経・般若心経・阿弥陀経も読みます。念仏はふつう十念により、時に五百遍とか二十分とかに専注して唱える別時念仏の形があります。勤行の最後には、身近な先祖の菩提と有縁無縁の人達の無事を願って、読経と念仏の功を廻向します。こうした日常の読経と十念及び別時念仏が、今日では宗徒の不断念仏のあり方となっています。

ご開山の不断念仏は、阿弥陀如来の四十八願中の第十八願（本願）、すなわちその要文では「至心信樂 欲生我國 乃至十念」にもとづいて勧められます。至心信樂とは真心をもつて阿弥陀仏を信ずること、また欲生我國は阿弥陀仏の極樂浄土に生まれたいと願う

こと、そして乃至十念は念仏すなわち南無阿弥陀仏を称えることです。このことは仏様と浄土を拠る所に生活を立てるのに他なりません。

ご開山自身は一向専称により、西教寺におられる時は一日六万遍に及ぶ念仏を、また期間を設けて阿弥陀仏の願数にちなむ四十八日の別時念仏を修め、念仏三昧の深い境地を開拓されました。そして、念仏行者を助け導くことを法語の中に誓われ、あらゆる人々の現世における安穩と、来世の往生極樂を念じられました。

真盛上人の教化には円頓戒（菩薩戒経に説く十戒）を諭し、十念を授けました。十念具足という言葉があるように、わずか十念を称える時にも、ご開山が一緒に寄り添って念仏して下さっていることを思い、その念を深くすることによつて自身とその周りが阿弥陀仏の明るい智慧の光に照らされ、同時に仏の大慈大悲の心に抱かれる想いに仏の大慈大悲の心に満たされるとき、（摂取不捨の利益）に満たされるとき、そこに安心の確立があります。浄土に生まれ仏と成るのはこの命を終えた後であるとしても、不断の念仏行が仏様の本願力を招いて常に阿弥陀仏が寄り添って生活を支えて下さっていること

を信じ、家族を初め地域の人々、及び有縁無縁の人達との繋がりと御影様に思いをはせ、それらの総体として仏様のはたらきが我が身を包むのを実感して、安穩と喜びをいただくのが念仏者の生活と言えましょう。

コロナ禍のなかでは、悪弊を回避するための適切な対応と、正しい情報を選択する知恵をもつことに心がけ、不運に亡くなられた人達の菩提と、今苦境に陥っている方達が安樂を取り戻すことを願い、念仏安心の中で互いに思いやり助け合つて安全な日々を保つことを念じます。



別時念仏会に参詣して

伊勢教区 西来寺総代
勝久寺檀徒
中村 久憲

総本山西教寺恒例の別時念仏会、例年は一泊二日の日程でありましたが、本年は、新型コロナウイルス感染症のため短縮して日帰り一日間となりました。今年も西来寺世話方で参詣者を募集したところコロナの関係もあり、少なく十七名の参詣者ですが、密にならないように大型貸切バスでお参りしました。

午前十時半より阿弥陀経を読誦してから、真読念仏を勤めました。休憩後管長猥下の御法話があり、昼食後午後一時から圓戒國師和讃、真読念仏、先祖供養の特別回向を勤めて頂きました。夕勤（自我偈）を勤めて三時四十分下山しました。今年も、百年近く続いている伝統法要別時念仏会に結衆させて頂きました事ありがとうございました。

私は総本山西教寺の別時念仏会に平成十九年から毎年参詣して今年で十三回参詣させて頂きました。

これまでに深く印象に残ったのが、平成二十二年の別時念仏会の二日目に浄土宗法然上人八百回忌前年慶讃法要を、西教寺から知恩院へ別時念仏会結衆者に併せ宗内詠歌講の皆様と総勢

六百人がバスで向かい知恩院御影堂に集まって、管長猥下御指導のもと法然上人慶讃法要が厳修されました。

法要は「管弦講順次往生講式」で勤められ、式衆による声明と真盛楽所の雅楽曲との合奏が堂内に響き渡り感慨無量でした。宗内詠歌講の皆様のお詠歌、別時念仏会結衆者のお念仏、今までにない慶讃法要でした。

又平成二十六年には天台寺門宗総本山園城寺（三井寺）で智証大師円珍和尚千二百年慶讃法要が厳修され、金堂にて別時念仏会結衆者と参詣者が一緒に念仏を勤めました。

国宝の黄不動尊、西国霊場の観音様も御開帳され参拝させて頂き良いご縁を結んで頂きました。

たまには別時念仏会二日目に別の所に参詣するよう企画して下さればありがたく、結衆者も多くなると思います。

私は平成七年より宗議会議員をさせて頂いた頃西教寺第四十二世山本孝圓管長猥下より色紙を賜りました（真盛のお喜かしこみ生きぬかん 南無阿弥陀仏と不断に唱えて）私は教訓として念仏を唱えて行きたいと思っています。

平成二十九年から始められた別格本山西来寺での別時念仏会、毎週日曜日朝八時より九時まで、寺井御山主御導師のもと山内ご住職と一緒に在家勤行式を勤め、念仏を二十分間南無阿弥陀仏を木魚を叩いて約五百回唱えます。

その後、御山主の法話主にな家勤行式の解説をして頂きます。

毎週日曜日、家内と近所の方をお誘いして、お参りしています。

西来寺の世話方をさせて頂きまだまだ未熟な私ですが、仏縁を大切に仏様のご加護と先祖の恩恵を忘れることなく



令和二年宗祖真盛上人鑽仰会法要・総会について

宗祖真盛上人鑽仰会 会長 川合 歳明

昨今は世界的な新型コロナウイルス感染拡大となり、総本山西教寺は四月二十七日より五月二十六日まで一カ月間参詣停止となりましたが、国の緊急事態宣言が解除されましたので、十一月九日（月）十時より宗祖真盛上人鑽仰会法要を厳修させて頂き、続いて管長武田圓龍猥下に「慈悲の心」と題した記念講演を賜り、続いて総会を開催することができました。ご参加いただいた会員の皆様には、誠に有難うございました。

さて、現在の宗祖真盛上人鑽仰会は平成二十四年四月に設立いたしました。平成二十六年四月厳修の恵心僧都一千年御遠忌大法要・真朗上人報恩謝徳法要を機に更に活動の活発化を図るため、会員加入を募り今日に至っております。早九年目を迎え、本年十一月には

不断念佛相続十九萬日大法会

く感謝し、これからも不断に念仏を唱えて行きたいと思っています。

令和三年十一月二日より総本山西教寺で不断念佛相続十九萬日大法会が厳修されます。私も元気で檀家の方々と一緒にお参りさせて頂くことを今から楽しみにしています。

聖徳太子一千四百年御遠忌
伝教大師一千二百年御遠忌

に遇わせていただき恩徳に報いたいと存じます。

令和三年度の宗祖真盛上人鑽仰会法要・総会は九月彼岸前と予定いたしております。

宗祖大師の遺徳を鑽仰し念佛の弘通を願い、今後とも恩徳に報いたいと思います。本会活動への益々の御支援と一人でも多くの方の御入会をお願い申し上げます。



記念講演：管長 武田圓龍 猥下



鑽仰会法要 圓戒國師御和讃を唱和

天台眞盛宗の雅楽がく
⑨

今回は眞盛宗だけで声明と雅楽の両輪が演奏できる順次往生講式と言う大きな講式法要についてお話をさせていただきます。

まず我宗、人間宗宝の故片岡義道先生が、数百年の時を経た今資料は有っても現存していない宴曲や講式を研究されて復元、復曲されております。

その中に、平安時代に盛んに講式と言う形態の催事が行われ、その内容は多種多様で声明や催馬楽、等が雅楽の演奏を伴って奏され、また宮廷などで雅人が楽しんでいたと古文書に記されています。

音楽、歴史的な視点から学者の方々が研究されている順次往生講式と言う講式の経文が京都の浄土宗総本山知恩院に残されております。

この順次往生講式は叡山の僧真源によつて作られました。この講式は順次に極楽唱歌（仏の世界を賛嘆する）と言われる声明に雅楽の伴奏が付き、唄われその構成は本文（式門）、音楽（雅楽曲を伴奏に付けた声明）、催馬楽（神楽歌が原点で中世歌謡として流行っていた）を一組として十二組で成る壮大

な講式です。

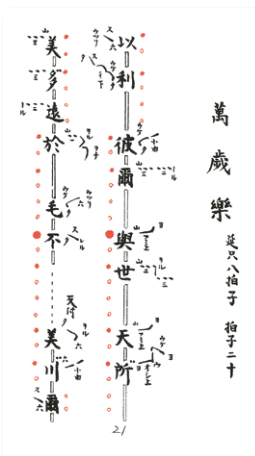
この順次往生講式を故片岡先生は極楽唱歌の声明部分、全てを復曲しその一部を雅楽の大家元宮内庁式楽部、芝祐靖先生の協力を仰ぎ平成五年に国立劇場小劇場で発表します。

（この時は東京の叡山の僧侶と芝先生の雅楽団体が演奏し片岡先生のみが参加する形態）

眞盛宗としての初発表は天王寺楽所の清水修先生の協力を仰ぎ平成七年大津伝統芸能会館で極楽唱歌を声明と雅楽の両方を演奏する公演を行いました。

この公演（順次往生講式）は片岡先生ご生存の平成十二年の国立能楽堂まで数回にわたつて続き、片岡先生没後は平成二十二年の法然上人八百回忌慶讃法要での演奏へと現在も続いています。次回では二〇二一年の不断念仏相続十九萬日で演奏する慈摂大師御影供についてご説明いたします。

（文責 多治見真篤）



宗祖大師殿の唐門

滋賀教区 深光寺住職 宗務総長 前阪 良憲

NHK大河ドラマ『麒麟がくる』の放映で、一躍脚光を浴びているのが、宗祖大師殿の唐門である。西教寺の境内には勅使門、総門を含め十一の門が建立されている。

その中でも宗祖大師殿正面の門は、唐門といつて四脚門前後唐破風造側面入母屋松皮葺きで桃山風として風格を現している。この唐門の内側、外側には二面の欄間が張られており、彫刻は麒麟（阿形・吽形）が二頭彫られている。唐門は大正六年（一九一七）不断念仏相続十五萬日大法会記念事業として建設、同時に築地塀、北側には宗祖大師殿通用門が建設されている。当寺の計画として現在の参道より南側に宗祖大師殿へ直接繋がる参詣道を作る予定であったが、実現までには至らなかった。唐門を通過して宗祖大師殿へ参り、通用門を通過して石段を登り本堂へと参詣、本坊正面より下つて通用門（現在の門）を通過して勅使門前から現在の参道を下るコースを描いていたようである。その構想が実現されなかったため、唐門は西教寺貫首猊下の晋山式のみ開門され、日常は閉めたままの開かずの唐門となり琵琶湖を見ることが出来ない

かった。その後昭和六十二年宗祖大師殿大修理工事に着手、工事完工をもって大師殿参拝の新参道計画が持ち



上がり、本山に参詣する人々に宗祖大師殿へ導くための方策が是非必要であると、当寺の片岡義道宗務総長の方針で新参道工事が実現した。新参道は山内禅林坊の上手左側西側に石段（七・七メートル）がつけられ、宗祖大師殿唐門まで二十七メートルに御影石が張り詰められ美しい参道が完成し、開かずの唐門が日常開けられ宗祖大師殿への参拝コースが出来上がった。

参道から見ると琵琶湖の眺望は絶景で多くの方々に感動を与えている。大河ドラマの主人公明智光秀、熙子もここから眺めたであろう琵琶湖の景色が光秀関連の冊子・ポスター等に唐門とともに記載され宣伝されている。開かずの門であった唐門が大河ドラマのお陰で西教寺の名所となつていく。二頭の麒麟が逞しく世に幸せを呼び、穏やかな世となることを祈念したい。

十九萬日大法会記念事業の紹介とその進捗状況について

今年十一月に予定されている大法会に向け、宗議会において次のとおり記念事業が決議されております。

これら事業の内容と現在までの進捗状況について報告します。

① 研修道場リニューアル

建築基準法に永年違反状態になっていた廊下耐火壁の増設、バリアフリー化としてエレベーターを二基新設、館内照明設備のLED化、空調設備の更新及び内装一新

② 本堂他防火栓の改修および収蔵庫屋根改修（共に国庫補助事業）

老朽化している屋内外消火栓及び火災報知設備の全面的改修、収蔵庫屋根の葺き替え（銅板からチタン製へ）

③ 本坊改修

参拝者用男女トイレのバリアフリー化など全面改修、参拝者用ホール、売店、宗務事務所等の機能強化のための内装改修など

④ 境内外構整備

本坊玄関から第一駐車場までの舗装打替え、他外構整備

⑤ 文化財修復事業

行快作阿弥陀三尊立像の補修（県補助事業）

劣化の進む桃山御殿内襖の将来修復に備え現状のデータ化

⑥ 記念出版

所蔵する宗宝、寺宝に関する記念誌などの発刊

⑦ 御木像修復

延暦寺講堂に安置されている真盛上人像の補修

以上の七事業を予算総額で五億四八五〇万円で計画し、十一月末時点で①③⑦の事業については既に完成し、残りの②④⑤⑥の事業についても現在鋭意作業が進んでいる。契約額ベースで約九十パーセントの進捗となっている。

また記念事業とは別枠で、今回特別に総額一億四七五〇万円で、総門横既設駐車場を拡張整備することとした事業については、新規に大型車を含め五十九台分の駐車が確保できる計画であるが、用地買収を終え、工事もすでに発注済で十一月末時点で約七十五パーセントの進捗となっている。

計画した事業はすべて順調に進捗しているが、これらの事業に充当している財源は大半が浄財であることに十分に留意し、今後事業の進捗を図りたいと考えております。



大根煮

一月十五日より二月十四日の約一ヶ月間、食堂にて西教寺秘伝大根煮をご賞味いただくことができます。

大根は、食中毒にかからないということから古来より年の始まりに大根煮を食べるとその一年は病気になるまいと言われたことから、無病息災を祈り食されたと言われております。

大根煮定食 一、三〇〇円（税別）
大根煮 八〇〇円（税別）

ひな御膳・ひな人形展

二月十五日より三月三日まで、食堂に於きまして、ひな御膳をご賞味いただいております。

このひな御膳は子供の成長を祈り食していただくお料理でございます。

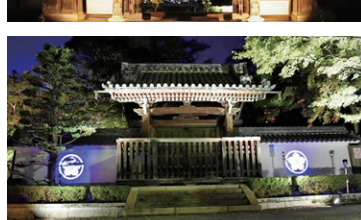
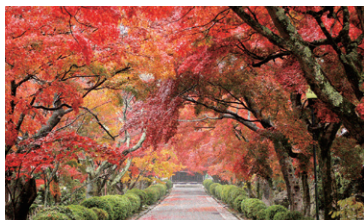
ひな人形展は、江戸時代からの美術的価値のある人形をご鑑賞いただけます。

ひな御膳 二、〇〇〇円（税別）
ひな人形展 四〇〇円（税別）



昼夜で一変 紅葉とライトアップ

西教寺の秋は、大変綺麗で一年のうち最も参詣者が訪れる季節です。また、毎年この時期に行っております境内のライトアップ（びわ湖大津観光協会主催）はNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放映に合わせ、桔梗紋や兜を照明で演出するなど趣向を凝らした充実した内容となりました。また、例年よりひと月早く十月一日より十二月六日までの間、実施いたしました。昼間の境内はモミジの真っ赤な装いですが、暗くなる夕方五時になると一変、七色の幻想的な演出のなか、参道には行灯を並べ昼夜を問わず多くの参拝者の目を引き付けていました。



時代の変化に即応した寺院・宗のあり方とは ―「宗のあり方審議会」での議論がスタート―

私たち天台真盛宗の寺院は、宗祖真盛上人の戒称二門の教えのもとに集い、住職を中心としてその教えを営々と受け継いで五百年余の歴史を織りなしてきました。それとともに、多くの寺院は地方の集落を基盤としつつ、檀家制度に支えられる形で維持・発展を遂げてきました。

ところが、昨今の社会変化、即ち宗教離れ・寺院離れ、地方の人口減少、集落機能の後退など、これらの現象はそうした基盤を大きく揺るがそうとしています。他方、住職の後継者不足による無住職寺院の増加など、寺院の側においてもその機能の弱体化が進んでいることも否定できません。

そのような問題意識のもと、私たちはこのたび「宗のあり方審議会」をスタートさせ、このテーマに正面から向きあい議論を進めることとしました。

「審議会」では、時代の変化に即応した寺院の姿はどういったものか、住職・僧侶のどうあるべきか、更にはそれを支える天台真盛宗はどのような姿であるべきか、これらについてできるだけ具体的なイメージを明らかにしたいと考えています。その後、そのあるべき姿の実現を図るうえで、寺院・

住職としてどういった取り組みが必要か、また宗としてどのように制度を変えていくべきかなどについて、概ね二年間をめどに対応策を検討していきます。

私たちの寺院が檀信徒の皆さん方に寄り添いながら、地域にお住いの方々の心のよりどころとして存在しつづけるよう、私たちの取り組みの行方をどうかあたたかくお見守り下さい。また、ご意見などございましたら、ご住職を通じて本山事務所までお寄せいただければ幸いです。

檀信徒の皆さまへお願い

総本山西教寺にご参拝の際は、先にご配布させていただきました「檀信徒用無料拝観券（ご家族五名様まで）」を必ず受付へご提示ください。紛失された方は、本紙（寶珠）をお持ちいただきご提示いただきますよう、お願い申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

電話 大津（〇七七五七八）〇一三番代

印刷所

宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話（〇七七五三三）二二四一番